

「京都から挑戦する“新”21世紀づくり」

第2回「『少子高齢化』をどう捉えるか～

そのインパクトと政策」

長谷川和子（京都クオリア研究所取締役）

日本が直面している少子高齢化、人口減少問題、今回は人口問題を文明史的に捉えてみましたが、2回目は、この3月まで国立社会保障・人口問題研究所の所長をつとめていらっしゃいました西村周三さんに「少子高齢化をどう捉えるか」をテーマに、お話していただきます。われわれの暮らしそのものから、少子高齢化をどう捉えたらいいかというお話をしていただけたらいいかと考えております。それでは西村さん、よろしくお願いいたします。

☆スピーチ

西村 周三（国立社会保障・人口問題研究所名誉所長 京都大学名誉教授）



ちょっと一言だけ、前置きとして面白い話からします。この3月まで国立社会保障・人口問題研究所におりまして、実は、その4年間で、研究所を相当変えようと頑張りました。どういうことかという、この研究所には面白い歴史がありまして、「人口政策に関する政策提言はしない」ということになっていたのです。で、それは、先だってから、例えば、この後紹介しますが、3カ月ぐらい前、元岩手県知事、総務大臣もされた増田寛也さんが、大変インパクトのある人口政策の提言をされ、日本中いろんなところに衝撃を与えています。日本中、子どもが減って大変やと、もっと正確にいうと、日本中トータルに子どもが減っている深刻さは、なかなかピンとこないんだけど、目に見えて人口が減っているところ

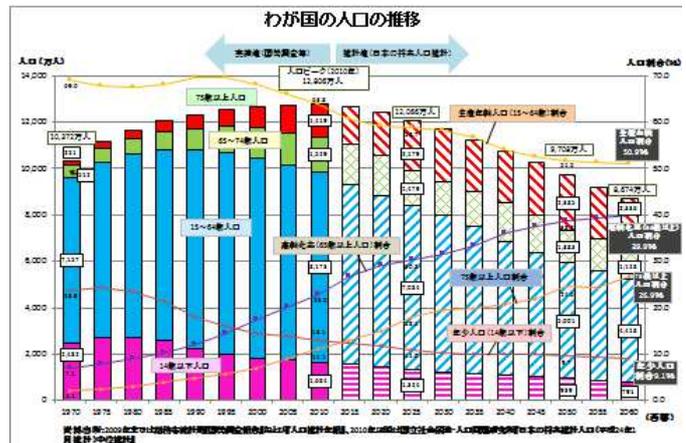
が激増していた。これがポイントだったんですね。そのインパクトが伝わって、特に、都道府県、市町村の議員さんに、大きな影響を与え、うちの地域は大変なことになる。どうすればいいか。ということになり、次に、考えられたことは、これ、非常に短絡的なんです、一部正しいんだけど、「早く、女の人に結婚させい」という話になったわけです。いろんなところでそういう発言が出て、大変なことになったという経過があります。

実は、こういう議論を、私は、研究所で2年ほど前から、散々やりました。つまり、いろんな意見があると思いますが、まあ、移民の問題、外国からの人の受入問題は後で話題にすることにして、ちょっと置いておきます。個人的には私は、日本の国民が減っていくことに対して危機感を持っています。これは総論です。しかし、じゃあ、明日どこで誰が子どもをつくるねん、っていう話とは、これ、ちょっと違う話なんです。しかし、歴史的には、実は、この二つは密接に関連してきました。その結果、苦い経験をしてきたのが、この研究所だったんです。戦前、第二次大戦の前に「産めよ増やせよ」という政策に若干関与したという歴史がありまして、そこで、戦後、政策に関わることを控えるべき雰囲気

気がすごい出てきました。で、私は実は、その真中に立って、「研究重視はとていいんだけど、やっぱり、そこから、ある程度国民にインパクトを与えるような研究成果を出すべきではないか」という話をしてきました。しかし、かといって同時に、女性に対して「お前、結婚して子どもをつくれ」というのはおかしいでしょうっていう姿勢をしっかりと持たないと、そういう問題の扱いは難しい。この3カ月ぐらいで、そういうことを、身を持って経験した次第です。こういう話が、きょうのテーマです。

どっちかいうと私は専門が高齢化の方なんです。で、高齢化の話をして、同時に後半で、少子化の話をしてしたいと思います。その話は、みなさんも心して聞いてほしい。つまり、きょう、西村の話聞いて、女性の方は、明日、結婚して早く子どもを産もうというふうに思う必要はないということですね。しかし、トータルでみると、やっぱり、日本の人口が、国民とあえて言いましたが、外国人が日本人になるってということも含めて、国民がどんどん減っていくっていうことに危機感を持ちます。どういう理由かという、人口が減ること自体は全然問題はありません。しかし、これから、どんどん子どもが減っていくと、年齢構成のバランスが、すごく歪んでしまう。その結果、多くの深刻な社会的問題が発生する。そういう意味で、やっぱり子どもは増えてほしいというスタンスでお話をしたいと思っております。

ポイントを先に言いますと、少子高齢化は、時間軸と地理軸を二つ分けて考える必要がある。時間軸っていうのは、トータルな日本人、日本国民の数がこれからどうなるかを時間を追ってみていく。それだけではなくて、例えばある村、あるいは一つの離島の人口がどんどん減っているという話とは見方がちょっと違う。両方考える必要がある。で、その前提で一つは、この問題が、今の二つの軸を非常に象徴的に表すものです。ピラミッド図は用意していませんが、絵に描いたら一発でわかります。(資料) 団塊の世代、今64、65、66歳、63、64、65歳でもでもいいです。それぐらいの人たちの塊があります。もう一つは、実は、団塊の人たちが産んだ第二ベビーブーマーってのが、40歳を超えました。実は、この方たち、女性に限定しますと、もう、子どもはつくらない。だから、その後、出生率はかなり回復していますが、絶対数はここ当分増えません。つまり、これ、問題発言ですが、分母が減るわけですから、出生率があがっても、絶対数はあまり増えないっていうことですね。



そういう問題があつて、これをもう少し詳しく見ていくと、特に、高齢化問題として特に深刻なのが、2025年問題。そういう人たちが75歳になります。(資料)

今、私、68歳になりましたが、「68歳なんて、年寄りとは言いません」ということにしましょうという話をします。ただ、75歳を超えると、平均的には、力がかなり落ちると考えるべき。75歳ぐらいまでは、ま、肉体的には別として、精神的とかいろんな意味で社会のリーダーとなる人も、決してこれから減るわけではないという一つメッセージ。同時に、やっぱり、80歳を超えると、話は別でしょう。特に、今一番深刻な話は、こういう人たちが健康になろうと、非常に頑張っているわけですが、私も、昔の68歳と比べると、すごく健康です。しかし、そういう努力をすればするほど長生きして、どうなるかという、認知症になります。(資料) データがあるんです。95歳以上に認知症発症率は50%。70代

後半だったら、まだ20%いきません。これ、体の元気とは関係なしに進むわけです。だから、長生きすればするほど、認知症になるってことがいえるかもしれないという話です。

ただ、これに対してどうするかという話は、時間があったら討論したいと思います。私は、これ、専門で、世界中で今、こういう話を、パラダイムシフトを考えつつあります。あんまりこの話をすると、みなさん引くんです。特に、お年寄りが多い所では…。でもドン引きやめて、認知症になっても幸せに暮らせる社会をどうやってつくるかという、そういう話です。

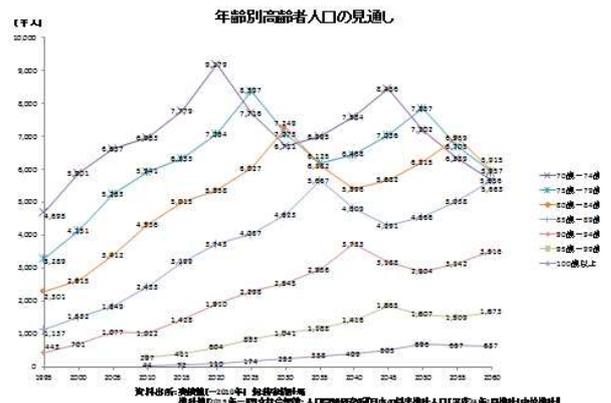
あえて、格好いいことという、19世紀は「人類が身分から解放される時代」20世紀は「人類が経済的格差から解放される時代」、そして21世紀は「あほ一頭の悪い人ーが解放される時代」と思っています。落語で、「自分がどっかで死んでるで」といわれて見に行くというのがあります。これ、あほの最たるものですが、でも、こういう人間が幸せに暮らせる社会が江戸時代でした。ですから、そういう意味で、記憶力を失っても幸せな暮らしを求めていくのが21世紀だと思うんです。ちょっと余談でした。

働く人の層を変える必要がある。そして、今言ったように、この時、ひとり一人の問題と社会全体の問題がどういふふうに関連していくかということも話したいと思います。そしてもう一つは地域。既にちらっと言いしたが、75歳以上の高齢者が、日本中でまんべんなく増えるんだったらあんまり深刻ではないんですが、実は、大都市にほとんど集中します。これをどうするか。むしろ、東北とか、ここは、これから人口は減りますから、お年寄りの数は減ります。もう消えるだけ。ここは、町が消えるんです。そして、大都市は、消えませんが、大都市で、お年寄りが激増するっていう、この問題をどういふふうにか考えるか。

そして、少子化の問題は、今、急遽、安倍内閣で経済政策、あるいは成長戦略として謳われ始めました。これを最後に話します。

わが国の人口の推移の図ですが、(資料)ここ見たら(2060年)人口は8674万人。1億を切るのは2050年で、この頃に、国は1億を切らないようにするという政策を発表しました。何の意味があるねんと思えますが、まあ、そういう話です。先に言っておきますと、高齢化の予測は、ほとんど当てられると自信があります。元人口問題研究所所長として。でも、少子化の方は、ちょっとクエスチョンマークです。過去の歴史から見ても、そういう傾向があります。少子化の方は外れています。それと、もう一つ大事なポイントは、当たり前ですが、10年後、20年後、35年後という話を混同しないように。こういう話をすると、必ず、時代を一緒にしてしまうということがあります。はっきりわけないといけません。特に、経済学者がいろいろ言っていますが、このころの経済がどうなっているか、誰もわかりません。自信をもって、経済学者のいうことは怪しいといえます。「公的年金を将来もらえるでしょうか」という質問をする人がいますが、「そんなこと心配するな、そんなことわかるわけないやないか」というのが答えです。だって、今から、40年後になんぼもらえるかって、そんなこと想像できます？ その時の40万円、10万円の意味はなんやということも想像できないのに、ほとんどこの質問は意味がないというのが私の結論です。

ただ、大事なポイントは、この人たち(65歳~74歳)は、昔に比べて相当元気なので、もう高齢者とはいわないようにするほうがいい。そうすると、話はかなり変わる。もう一つ。さっき、町や村が消えます、という話をしましたが、意外にしぶとく生き残ったのが「限界集落」です。いまか



ら 20 年ぐらい前に、総務省がこんだけぐらい市町村が消えるという話をしました。結論、殆ど消えませんでした。今、増田さんが消えるといってる話をしました。でも、私はほとんど消えないと思います。まあ、これは別の話なんですけど、このことは覚えておいてください。それより、一番深刻なのは、2025 年頃から、都市部で 75 歳以上の高齢者が激増する。これをどうするのか、これまた、解決策はありません。もう一つは、実は、元気なのに、お金をもらっていない人が激増している。この人たちを、どういうふうに有効に活用するかっていう問題は、もっともっと深刻に考える必要がある。

で、子どもの話。サーッといきますが、ここは、いろんな議論が出ると思います。きょうか、きのうの新聞に、幼児教育(幼稚園、保育所)無償化について「5 歳の子どもから段階的に進める」という方針が出たことが載っていました。それで、子どもが増えると思います？ ここは、みなさんと議論したいと思いますが、私の意見は、最低でも、年間 100 万円ぐらいやらないと、少子化問題は解決しないと思います。この額はそんなに大きな額ではありません。年間 100 万人ぐらい生まれますから、1 兆円、1 歳～5 歳まで出すと 5 兆円、13 歳まで出すと 13 兆円。で、消費税 2%、約 2 兆 5 千億円。だから 2%あげたら、5 歳までに一人 100 万円、お金を使うことができます。それぐらいやらないと少子化は食い止めることはできない。

もうちょっと、余談をいうと、ドイツの大学は、ほとんど授業料がただですね。それで、8 年いけます。で、その間に、結婚して、勉強はどうしているか知らないですけど、子どもをたくさんつくっている若い人が多いんです。そこもヒントになりますね。そういうことを考えながら、いろんな総合的な施策が必要だと思います。ところが、どうも、日本は、高齢者ばかりに社会保障が偏っていて、若い人への施策が薄い。特に、この 10 歳ごとのグラフ(6P)をみてほしいですが、高齢者は激増して、特にすごいのは、100 歳以上がついに 5 万人を超えました。2025 年には 17 万人になります。こういう人たちをどうするのかというのも、別の意味で、興味深いテーマです。次の表(7)では、高齢世代と生産年齢人口との比率、高齢者を何人で支えるかというのを示していますが、お年寄りが働く人間になったら、深刻な問題は随分先送りできるということです。(資料) その下のグラフは、この 20 年間の高齢者の生活機能の変化です。確実に生活機能は向上しており、お年寄りが元気になって

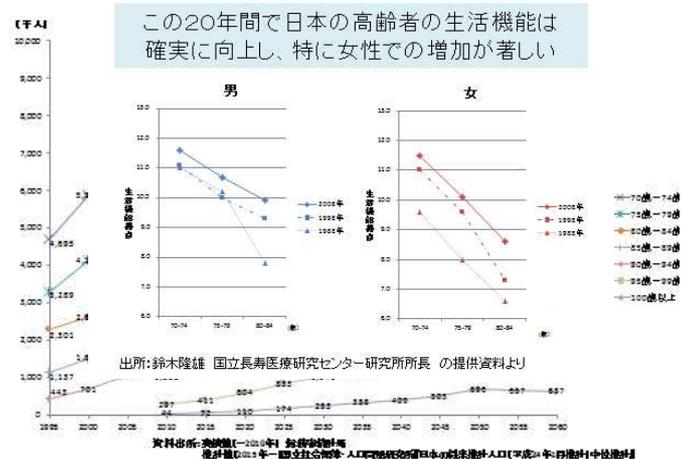


表1-1-6 高齢世代人口と生産年齢人口の比率

	生産年齢人口(15-64歳)を支え手とすると			15-69歳を支え手とすると	
	(a) 65歳以上を何人で支えるのか	(b) 70歳以上を何人で支えるのか	(c) 75歳以上を何人で支えるのか	(b') 70歳以上を何人で支えるのか	(c') 75歳以上を何人で支えるのか
昭和35(1960)	11.2	18.8	36.8	19.5	38.2
45(1970)	9.8	16.4	32.2	17.1	33.6
55(1980)	7.4	11.8	21.5	12.4	22.6
平成 2(1990)	5.8	8.8	14.4	9.3	15.2
12(2000)	3.9	5.8	9.6	6.3	10.4
17(2005)	3.3	4.6	7.2	5.0	7.9
22(2010)	2.8	3.8	5.7	4.2	6.3
27(2015)	2.3	3.2	4.7	3.6	5.3
37(2025)	2.0	2.4	3.3	2.7	3.6
47(2035)	1.7	2.1	2.8	2.4	3.2
57(2045)	1.4	1.7	2.4	2.0	2.7
67(2055)	1.3	1.5	1.9	1.7	2.2

資料: 平成17年までは総務省「国勢調査」、平成22年は「人口推計」より内閣府作成
平成27年以降は国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(平成18年12月推計)」の世帯中位・死亡中位推定による推計結果



注意: 古い推計(H18年推計)ですが、ほとんど変わっていません

地理的に見た人口問題

- 首都圏の高齢者激増、都道府県間では県庁所在地に集中
- 地方都市、中山間地域、過疎地域

- 下記の文献2は、「行政的発想」への興味深い批判
- 後に触れる「地域包括ケア」との関連

- 参考文献
- 三浦展『東京は郊外から消えていく! : 首都圏高齢化・未婚化・空き家地図』(光文社新書、2012)

今後急速に高齢化が進む都市部(その2)

都道府県別の高齢者(75歳以上)人口の推移

	2010年時点の 高齢者人口(万人)	2025年時点の 高齢者人口(万人)	増加数 (万人)	増加率	順位
埼玉県	58.9	117.7	58.8	+100%	1
千葉県	56.3	108.2	52.0	+92%	2
神奈川県	79.4	148.5	69.2	+87%	3
大阪府	84.3	152.8	68.5	+81%	4
愛知県	66.0	116.6	50.6	+77%	5
(東京都)	123.4	197.7	74.3	+60%	(8)
岩手県	19.3	23.4	4.1	+21%	43
秋田県	17.5	20.5	3.0	+17%	44
鹿児島県	25.4	29.5	4.1	+16%	45
鳥取県	11.9	13.7	1.8	+15%	46
山形県	18.1	20.7	2.6	+14%	47
全国	1,419.4	2,178.6	759.2	+53%	

【資料】2010年高齢者人口「平成22年国勢調査」総務省統計局
2025年高齢者人口「日本の地域別将来推計人口(平成25年3月推計)」(国立社会保障・人口問題研究所)

いるということがわかります。興味のある方は、この研究者の研究成果をお読みください。

で、地理的に見た人口問題（9、10P）。これ、面白いのは、東京の様子が相当変わります。東京は、75歳以上を高齢者と考えると、2010年の123万人が25年には200万人ぐらい、要するに1.6倍になる。なんと率からいうと、埼玉は倍になります。こんだけの人が、この歳（75歳）を超えると、大体お世話が必要になりますから、そういう人がこれだけ増えると大変よね、というわけで、これから大きな問題です。山形とか、こっちはほとんど増えません。そういうわけで、東京、首都圏問題。その高齢化、未婚化、その結果、空き家がすごく増えているという話。これは、住宅問題という観点から、大きなテーマです。だって、現状のままいくと、通勤する人の数が減るわけですからね。その結果、お年寄りが増えますが、例えば、八王子のお年寄りは、昔は都心に通勤しましたが、もう、行きません。その街で暮らします。電鉄会社は、いま、大変深刻で、そのあたりの家は、今もう売れない。若い人は、おじいちゃん、おばあちゃんから財産をもらって、ほとんど借金なしで都心にマンションを買えるようになってきます。

こうしたことを背景に、増田さんたちはこういうことを言いました（11P）。つまり、2040年頃には「2割～5割の市町村が消える」。この時、気をつけてほしいのは、「2040年頃には」というのが一つ。もう一つは「消える」ってどういうんや、というのがはっきりしない。で、しかも、私がいた研究所の推計と増田さんたちの推計とが、ちょっと違うんです。

増田さんたちの考えには一理ある。大都市部で、超高齢化が進む。その結果、医療介護需要が増える。それは、間違いない。誰が、高齢者をお世話するのかというと、介護従事者でしょう。看護師とか、そういう人が、ここです、みんな地方から大都市にいくでしょう。その結果、地方から人がいなくなる。で、若干、これは正しい。ここが問題です。全く嘘やったら、人は相手にしません。しかし、若干正しいから、このお話は、大変なインパクトをもたらしました。

その結果、そこには出していませんが、「消える市町村リスト」、こういうリストが出てまして、例えば京都でいいますと、井手町、笠置町、和東町、南山城村、京丹波町、伊根町、こっだけ消える。ただ、これちょっと言い過ぎで、ある程度正しいのは、いろんな意味で東京集中が進んでいますので、地方で仕事が無いと、やっぱりみんな移ります。その結果、一理ある。高齢者も減るわけだから、地方の病院なんかで経営が成り立たなくなる可能性があります。だから、部分的には正しいけれど、ちょっとオーバーな表現。

増田寛也氏たちの問題提起 ただし議論はやや誇大か？

- 増田氏たちは、2040年頃には2割～5割の市町村が消滅すると警告
- 増田氏は、大都市部での超高齢化にともなう医療・介護需要の増大が、若年医療・介護従事者(看護師、薬剤師、介護従事者など)の大都市部への流出を招くと予測。
- 医療・介護従事者の全就業者に占める比率は？
- 二つの課題は分けて考えた方がよい。
- しかし「警鐘」として、自治体は深刻に受け留めるべき
- 過去の趨勢を考えたとき、「国による思い切った施策」が効果を奏する可能性は低い←自助



そのへんを、(14P) この表にシミュレーションで示しています。ただ、警鐘としては、これは、大変大事で、自治体が、これによって初めて、人口減少について真剣に考えようとし始めました。今まで、あんまり考えていないんですよ。これの理由はいくつかあって、議員さんは、自分たちの首が危くなるということ、減るってことを見たくなかったんですね。それから、職員のかたも、ほとんどの市町村の推計は、大体2割がた、私どもの推計よりも多めになっていました。これは、わかりますね。補助金は、人口にほとんど比例するんです。そんなわけで人口減少について、真剣に考えてきていませんでした。まあ、国がやっても難しく地方自治体で考える必要がある、といえます。

高齢化というのが、一つのテーマではあるんですが、もう一つは単身化。

(26P) 高齢単身が 1984 年から 2010 年で、こういうふうになったというのは、大体みなさん想像できると思うんですが、問題は、実はここなんです。一人暮らしの若者が、463 万人から 600 万人になりました。で、このことが、例えば、家のあり方について、相当大きく問題提起をしている。今、お年寄りが、一人で大きな家に住んでいると

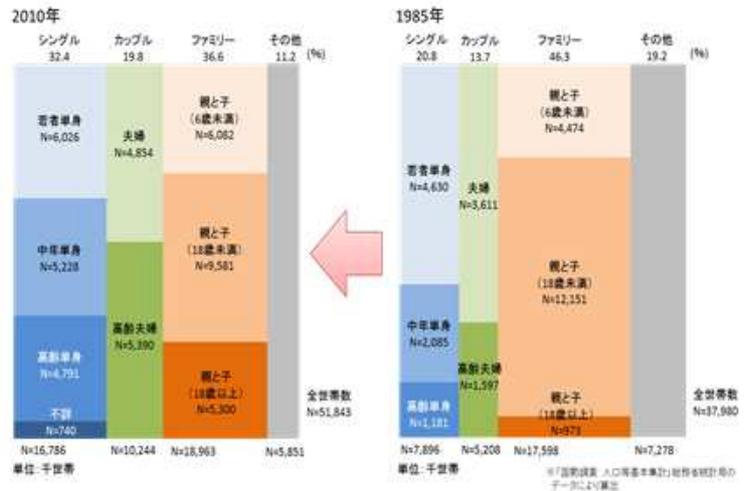
いうことが激増していますね。同時に、家の単位が、単身者が増えて、みんな小さな家に住むようになってきました。で、街の作り、配置はすごくいびつになっているっていう現象の象徴です。

子どもが減っているっていう問題は、経済的にも大変という話は、時間軸をどんだけにおくかで相当話が違いますから、これ、注意してくださいね。2020 年ごろの話と、50 年ごろの話と、先にも言いましたように、相当違います。もっと正確に言いますと、毎年減っている人口の数は、わずか 0・2% ぐらいしか減っていません。数からいったら、大して減っていません。ただ、分母が減るとおなじ数が減っても率は上がりますから、もっと先で深刻になります。

そういうことを考えた時、大きく浮かび上がってくるのは、大都市部の経済と地方の経済がどういふふうに関係していくかっていう問題で、経済では大きなテーマです。今、大変話題を呼んでいるのは、この本「里山資本主義」で、これを書いた方は、テレビにも相当出しておられて、ローカル経済の意義をすごく訴えておられます。ただ、私は、ちょっと異和感があったんですね。それは、日本経済は、かなりのウエートでグローバル化していますから。それで、この人が書いたこの話の方が面白い。タイトル通り「なぜローカル経済から日本は蘇るのか」という話を、問題提起として出しているんですが、これから、東京とそれ以外の地方という軸とグローバルとローカルの関係をどうやって見ていくかということが大きな課題になると思います。

結論を申し上げますと、人口の問題は、あんまり正面から話をするっていうのは、私は意味が無いと思います。さっきも言ったように、例えば、政府が掲げた 1 億人目標を設定しました、こんなことほんとに意味があるのかな。出生率を相当上げるというのは、見た目、聞こえはいいんですね。でも、イマイチです。どうやって上げるかも、説明もなくはっきりしない…など、今いろいろ出ている議論が正論

世帯の類型の変化



だと思えます。

少子化の話は、時間の関係でできませんでした。ただ、この議論は、言い出したら簡単には終わらない。こうしたら、こうしたら、といっぱい意見が出るとおもいますが、それは無意味やと私は思うんです。では、これで、あとの討論に繋げたいと思えます。

「京都から挑戦する“新”21世紀づくり」

第2回「『少子高齢化』をどう捉えるか～

長谷川

スピーチ、どうもありがとうございました。西村さんは、京都大学で教鞭を執っていらっしゃる頃には、「よしもと」が話し方を学びに来たというほどの評判があったそうで、とってもわかりやすいお話だったと思います。多分、ちょっと30分では話しきれない内容だと存じますので、この後の討論で、話し足りなかったところは補っていただきたいと思います。これから、京都大学の山口栄一さんにファシリテーターを務めていただき、この10月から京都大学の総長に就任される山極寿一さんと西村さんの3人、そしてご来場の方にも参加していただき、ディスカッションを始めさせていただきます。では、山口さん、よろしくどうぞ。

★ディスカッション

▽ ディスカッサント

▽ ディスカッサント

山極 寿一（京都大学大学院理学研究科教授）

山口 栄一（京都大学大学院思修館教授）

+ + + +

西村 周三（国立社会保障・人口問題研究所名誉所長 京都大学名誉教授）

山口 栄一（京都大学大学院思修館教授）



4年ぶりに「西村節」を聞いて、私は、すごく元気になりました。人口問題研究所の4年間のストレスから解放された西村さんから発せられた西村節を久しぶりに堪能いたしました。西村さんに京都に帰ってきていただいて、本当にうれしく思っております。これから、ファシリテーターの役得として、まず、私の方から質問をさせていただきます。

まず、少子化のことです。2000年頃、私は少子化の原因を定量的に調べたことがあります。合計特殊出生率というのは、 n 歳の女性の数を分母にして、 n 歳の女性から生まれた子の数を分子にして、これを n について、つまり年齢別にずっと足して行って計算します。しかし、これでは少子化の真の原因が分かりません。そこで、私は、独自に別の統計をつくりました。 n 歳の女性の数ではなく n 歳の既婚女性を分母にしてこの積分を行ないます。既婚女性の合計特殊出生率と名付けました。すると、合計特殊出生率は、既婚女性の合計特殊出生率と女性の既婚率のコンボリキュレーション積になるので、少子化の真の原因が女性の生涯未婚率が低いせいなのか、それともやっぱり結婚したあと女性が子供を産まなくなったのか、それぞれの原因を定量的に分解することができます。というのは、

お話にあったように日本は非嫡出子の割合が1パーセント程度だからです。つまり日本では、子供は99パーセント、結婚したカップルから生まれている。

私は、当時の3300市町村ごとにこれを求めたいと思い、厚生省の地下倉庫に行って、1年がかりで資料を全部コピーして（というのは、ダウンロードさせてくれないので）それを全部打ち込んで計算したんです。

それでわかったのは、1985年の時は、既婚女性は1人平均して1.8人を生む。95年は、既婚女性は、平均して2.0人産む。つまり、全国的に既婚女性は、生む子どもが増えるのです。この傾向はすべての市町村で同様で、東京も例外ではない。そこで少子化の要因分析を定量的に行ないますと、合計特殊出生率の低下というのは、100パーセント未婚率の増加によって説明できる。そういう結論に達しました。専門家の見地から、そういう理解でまちがいないでしょうか。

ところで私は、この4月に京大思修館に移ってきました。そしてほんとにいろいろ下らないルールがあることに辟易しています。思修館は全寮制です。必ず寮に入らねばなりません。当初私は、それをケンブリッジのカレッジ、あの全寮制の雰囲気だと勝手に想像していました。社会人を経験して入られた方もいらっしゃるの、結婚して入学された方もいらっしゃるし、入学したあと結婚される方もいます。

ところが、夫婦と一緒に住むのと聞くと、それは、規則で許されていないというんです。寮の部屋はシェアルームもあるので、比較的広くて二人で住める部屋もあるのです。でも、それは規則でダメ、一緒に住めないというんです。もっとびっくりしたのは、外泊は届け出なければいけないらしいのです。じゃあ、結婚できないではないか。結婚しても一緒に住めないではないか。結婚を否定する規則が京大にあるということです。人間の生活とは何か、家族をつくりあげるとはどういうことか、という深い社会学的考察を欠いたくだらない規則に満ち満ちているのです。

さっき、お話が出ていたように、ヨーロッパでは大学の授業料が要らないというのは人間のあり方に関する深い考察から出発しています。学生の中に結婚というのも、ケンブリッジでは当たり前のことで、それこそが人間的な社会生活です。子どももよく生まれて、カレッジですから、結婚すると家族部屋に移って、そこで子どもを育てるんです。それと比べると、京都大学では何だか子供じみたつまらない規則が多くて、それがいろんな人間的なことを阻害してるんじゃないかという気がして仕方ないんです。西村さん、いかがでしょうか。

西村 周三（国立社会保障・人口問題研究所名誉所長）

次期総長を前に、どういうべきか…、ははは。いや、次期られるから、余計、何かいうべきでしょうかね。おっしゃるね。ただ、今のお話を聞いてびっくりしました。というのは、は、全国の大学からすると最も自由なところで、寮について意味で自由過ぎて困るというのが現状なんです。だから、そ懲りて…」というのはあるかもしれませんね。しかし、基本京大が、今おっしゃったようなことをやっているのなら、絶対間違っているの、次期総長に、ははは、何とかしてもらおうということで…。



総長がお通りです逆に京大は、逆のの、「糞に

山口

ぜひ、山極さん、よろしくお願いたします。

山極 寿一（京都大学大学院理学研究科教授）



それは、ちょっと、問題ですね。うちの研究室でいえばね、学生結婚大流行です。しかも、結婚するとすぐ子どもをつくります。結婚しないでも子どもをつくります。最近にわかに、えらいベビーブームになっちゃいましてね、いい風潮かなと思っているんですけど…。寮の問題は何とか改善したいと思います。

ちょっと、別の話題、いいですか。限界集落が消えないというのは、驚きだったんですが、私の多分間違った常識なんでしょうけれど、だんだん人口が少なくなってくると、サービスが行き届かなくなってくる。特に、郊外に建てたマンションとか、一時、できましたよね。やがて子どもたちが出て行って老人だけになる。すると、スーパーがなくなり、病院もなくなってバスも来なくなり、結局、廃屋になっていくというのがあります。地方の集落もそうで、ご老人たちは自立ができず、そこでは暮らせず、みんな都市に出ていった子どもたちに引き取られていって、限界集落もなくなっていくんだらうと思っていたんです。一体、なぜ、限界集落は消えなかったんですか。

西村

ああ、ちょっと、それは、私の言い方もオーバー過ぎましたね。消えた集落が総務省の予測を大幅に下回ったということであり、みんな消えなかったわけではありません。で、ただ、面白いのは、一つの要因として、今残っているところは、65歳から74歳ぐらいの人が、75歳以上の人を相当支えている。これは、結構たくさんあって、65歳以上を高齢者というふうに考えて定義したことが間違っていたというのの一ついえるわけです。それから、さっき紹介した内容でいうと、やっぱり、かなり集落ごとに特徴がありまして、例えば、お祭りをする集落は、なかなか消えない。どうしてかという若い人が、祭り、盆と正月に帰ってくるからです。ミクロでいうと、いろいろ面白い特徴があります。逆にいうと、研究所で、この話をしたら、割りとさめた人が、「今、75歳を超えたらもう無理やから、今後は消えるんでしょうかね」といわれて、そうかもしれんねと言いました。だから、ちょっと、オーバーな言い方で、過去の20年間に関して予測が外れたということであって、事態は深刻であるということとは変わっていません。

山極

昔、「二重生活のすゝめ」ということを新聞記事でかいたことがあります。これだけ流通革命が起って、車を運転したり、航空運賃も安くなったので、故郷に帰ることができるようになった。週末に帰って、農業とかですね、まあ、杉の枝打ちとか、自分の親族が持っている土地を利用して、そこで、ある程度、商売したり、米や野菜を作ったりできるわけですよ。それをやれば、老人たちが都市へいなくてもよくなるし、しかも、籍を移さなければ、税金をそこで払えるわけですよ。実際、収入の高いスポーツ選手ではしゅっしんに住民票がある人もいて地元へ貢献している。だから、サービスは落ちない。そういうことを心がけていけば、ある程度人口は減っても、潜在人口が増え、やっていけるんじゃないか。そういう政策をとれば、限界集落も消滅は防げるんじゃないかと思ったんですが、どうでしょう。

西村

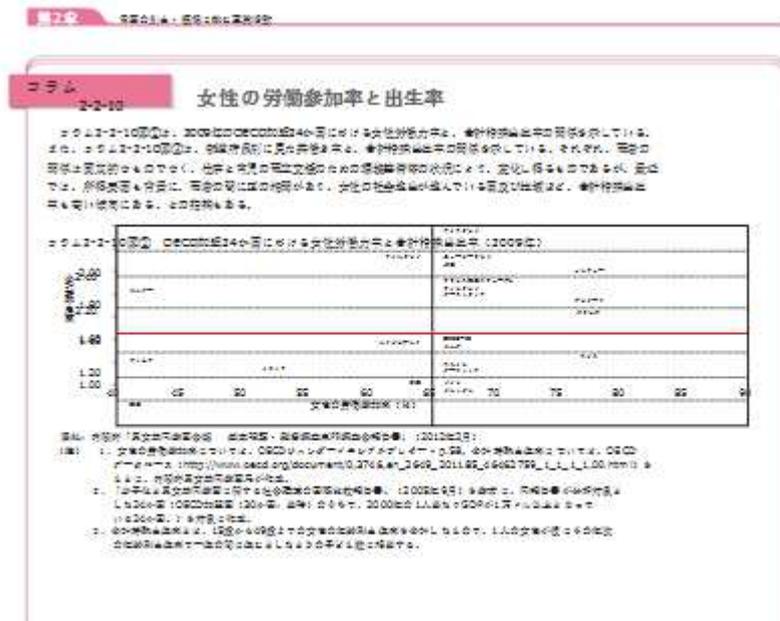
同意見です。今のお話で、実際に、隠岐の海士町というところでは、ほとんど限界集落なんですけど、人口は増えています。山崎亮一さんというコミュニティーデザインの専門の方がアドバイスを面白くして面白く話をやっていて、これ、日本中に同じような話がかかりあります。ただ、さっき、飛ばしたんですが、わりとマイクロな話と大きな日本全体の話を混同するナルシシズムはやめた方がいい。つまり、そういう事例はたくさんあります。たくさんありますが、にもかかわらず、全体の趨勢はっていうことですね。だから、日本人のメンタリティーっていうものを相当変えないと…。さっきおっしゃったように、都会と田舎、両方ですごしたらいいんですよ。特に冬の寒い間は都会に出てきて、いい気候になったらそっちへいったらというのは、理想的にはとても良くて、実際、実行している人も相当いるんですけど、ただ、日本人のメンタリティーが、まだまだそこまで、一般常識にはなっていないという問題もあるかなというふうに思います。今、山極さんがおっしゃったようなことを、私は、全国で展開する必要があるし、部分的に展開する可能性がかなり高いというふうに考えています。

山口

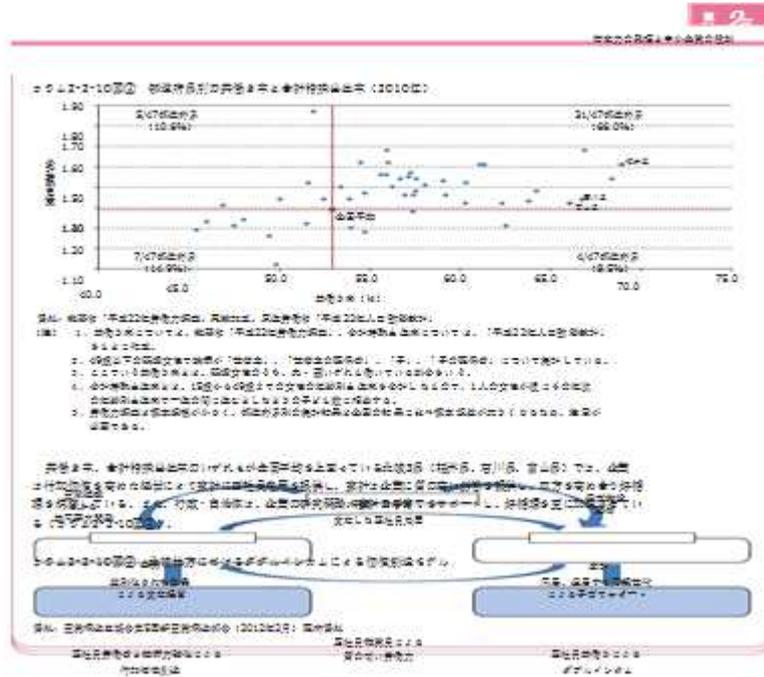
今の問題に関連してお聞きしたいんですけど、私がいつも不思議に思っている問題があって、それは、人口が5万人から10万人ぐらいの都市、いわゆる地方の小都市についてです。世界の都市を分析すると、日本はなぜか5万人から10万人ぐらいの都市って必ずさびれています。例えば、山口県の小都市など。街がさびしくてゴーストタウンのようです。それに比べると、たとえば日本同様、合計特殊出生率の低下が著しいイタリア。あそこに行くと、10万人ぐらいの都市のほうが、逆に生き生きしています。私はよくベルガモとか、クレモナとか、クレマとか、マチェラータとか、友人がたくさんいるし、とても好きなので頻りに訪れるんですけど、とても元気なんです。とくに夜はみんな街を散策している。これ、なんでなんですかね。日本って、何か制度の罫にはまっているような気がしてならないんですけど。

西村

今の話と関連して、ちょっと言い忘れたことがあって、一番出生率が低いのは東京都です。今のお話で、こういう議論をする人がいるんです。意外にいるんですよ。あえて口汚い言葉を使いますが、要するに「女が働きに出るから、子どもができないんや」。これねえ、びっくりするぐらい、こういう人が多いんです。しかし、答えは「ノー」。絶対にノー。一番女の人が働きに出てるのは東京ではなく、東京は、専業主婦率が一番高い。世界を見ても、ちょっと、この絵(30P、31P)がわかりにくいですが、出生率の模範都道府県は、福井、石川、



富山です。女がいばい働いて、子どもたくさんいる。から、このことをと、女性が働き出るほうが、むしろ子どもが増えるとうことが言える。特に、これは、まもうちょっと正確データを分析してませんが、おっしる市町村規模でとます。そうすると、っぱり、市町村規の比較的小さいと



つもだ見にろいで、だ、ないやりや模こ

ろの方が、女性が働きに出て出生率が高いんです。で、一つは、相関係数がそんなにめちゃくちゃ高いわけではないので、もう少し分析する必要がありますのですけれども、コンパクトシティであるかどうか、です。つまり、保育園に連れて行って、さらに、そこから職場に行く、家ー保育園ー職場、この三つが近接しているかどうかです。まだ、ちゃんと分析できていませんが、これが決定的と考えています。

そういう意味で、もう、みなさん、「女が働きに出るからや」とお考えになっているなら、頭の中を入れ替えてください。これ、講演とか終わった後に、必ずいうてこられるんです。図にも示しましたように、海外の事例と割と共通点があるんです。

山極

福井に行った時にね、福井県立大学の先生方とこういう問題を話すことがあって、確かに、福井県って、女性がよく働いている。ただしね、近くで働くんですよ。重要なことは、大家族で住んでいるんですね。だから、子どもを預ける必要がなかったり、子どもを預けても、みんな知っている人たちだから、いろいろ安心していられるということがあって、要するに、みんな働けるような環境にある。おっしゃるように、非常に近い所でネットワークが成立しているっていうのが、子どもが産まれても、離職率が異常に低い理由だとおっしゃっていました。

西村

ただ、福井は、昔は沖縄について出生率は2位だったんですが、だんだん下がって、今では8位です。その理由は、今、チラッとおっしゃった3世代世帯が減ってき始めたからです。それが、出生率を下げる要因になっていまして、西川（一誠）知事が私の研究所に来られまして、何か良い方法はないか、と。つまり、昔の、おじいちゃん、おばあちゃん、子、孫みんな一緒というのは、社会の規範に合わなくなってきた。で、そういう前提で、いま山極さんがおっしゃったような、まさに「近くに住んでいる」という政策をどうやって作るかということディスカッションしました。

難しいのは、この日本の社会で、おじいちゃん、おばあちゃん一緒に、という社会のあり方。こういう議論をすると、ほんと、この話は微妙で、じいちゃん、ばあちゃんの世話するの、そんなん嫌ですわ、という話になるわけですね。

山口

西村さんが京大の副学長をさ時代話に話したことを思い出すと、いろいろ突拍子もないアイデアして、その一つが「高度人材交点」につながってるんですけど、るに、家族で住む、血のつながっている者同士住むっていう固定観捨てて、社会的につながった人で住むという考えにすればいいないか、と思うのです。ケンブリッジ大学のカレッジのようなものくればいいんじゃないかという



れた
私は
を出
流
抛
要
す
つ
て
念
を
同
士
じ
ゃ
リ
ッ
を
つ
こ
と

です。ケンブリッジ大学のクエアホールカレッジなどは、結構、名誉教授のお年寄りを受け入れています。歩けなくなったような人も、そこでみんなで介護するようなシステムが出来上がっています。ですからカレッジを作って、そこに、教員も、大学院生も、名誉教授も、外国人サバティカルも住む、そういうふうな 100 人ぐらいで住まうシステムを作りあげると良いと思います。これ一つの 21 世紀型の住モデルとなると思うんですが、西村さん、いかがでしょうか？

西村

いや、ほんとに、おっしゃる通りで、以前、今のアイデアを聞いてからそれ以上、ちょっと進化がないのが情けないけど、このアイデアは、ぜひ広めていきたいと思いますね。

山極

生物学的に見ると、人間の認知能力は、26 歳をピークに急速に上昇するんですよ。そして、その後、徐々にしか低下しない。60、80 歳になっても、ほとんど高いままに保たれているんですね。その認知能力をいかすような社会を作らないと。西村さんがおっしゃったように、80 歳過ぎたら、介護が必要になります。介護が必要になっても、認知能力を駆使すれば非常に重要な立場にあるんだってことを社会的に作らないと、年寄りは、だんだん「老廃物」というような感じにされていくと思うんですよ。今おっしゃったカレッジもそうなんですけど、なぜ介護が必要で、なぜ、介護をきちんと社会の仕組みとして取り入れていかなくてはならないのか、という理由を、作っていかないとダメなんじゃないかと思うんです。

それから、もう一ついうと、これまで、人間は多子高齢化社会に暮していた。高齢者は、子どもの教育に非常に貢献した。だから、たくさん子どもを産めたわけです。でも、子どもが少なくなってきた時、子どもとの接点がなくなりましたよね。すると、高齢者の生きがいも、だんだん少なくなっていく。

高齢者と子どもは、非常に気が合うんです。そこが、崩れていくというのは、社会として大変もったいない。そういう仕組みも必要なんじゃないかなと思います。

山口

きょうは、わざわざアメリカのスタンフォード大学で研究者をされていたヤング吉原さんが、西村さんのお話を聞きたいとここに見えておられます。

アメリカの事例をお聞きしたいと思います。もちろんアメリカは、人口は増えていますし、日本やヨーロッパの一部が抱えている問題とは無縁です。アメリカは、才能のある人々を移民として上手に取り入れてる仕組があつて、吉原さんもまさにその一人だと思います。

吉原さん、一言アメリカの生活について、お聞かせいただけないでしょうか。

ヤング吉原麻里子（立命館大学客員教授）

今日のテーマは、私の専門の分野ではございませんので、1 市民としての視点からしか語れないですけども、今、山極先生がおっしゃった子どもたちと自分、親、3 世代の間の交流を生むような仕組みを作っていかななくてはということ、これ、私自身、私的な次元から感じていたことでございます。私のところも、研究を続ける上で、親に頼らざるを得ないのが現状ですが、今のところ親たちは頻りにアメリカに来て、子どものためにもなるし、生きがだからといって、非常にポジティブに育児を支えてくれているんですね。アメリカに生活している子どもにとって、祖父母というのは日本の文化とか価値観とかいったそういうものも伝えてくれる大切なリソースです。我が家では、祖父母が孫の育児に関わることで、単に子供を育てるという次元を超えて、価値観の伝達といった大切な交流を生んでいます。海外には日本語補習校というのがございまして、たとえばサンフランシスコ補習校は、現在世界で学生数が一番多いらしいんですが、そこが通を代がた子接交流にないま外にずれまにはかなりの数の子供達っていて、日本人の価値観って海外で生活する新世育っています。そういう子供達の日本の祖父母との方には、さきほどの「人材拠点」として、国内の家庭い面白さがあるように思す。そういうモデルが、海いる日本人の方の中で、少つできがっているかもしせん。



山口

私は、20 年前にフランスのコートダジュール日本語補習校の校長をボランティアでしていました。週一回、土曜日ですけど、日本語を中心に教えます。でもまあ、祭りをやっているようなもので、竹とんぼや竹馬を作ったりあやとりを教えたり、九九を教えたりするんですけど…。確かにあれば、ひとつの

面白い事例でした。家族を超えた人たちが一緒に住んで、楽しさをわかちあうシステムってのは多分必要だろうな、と思いました。

西村さんのおはなしで一番愕然としたのは、都市部の超高齢化ですよね。地方は、逆に私はチャンスが有ると思います。さまざまなアントルプルヌールたちがやってきて、いろんなことをやれる。それがこれからのチャンスに変わると言うんです。例えば、島根で「Ruby（プログラミング言語）」を作ったまつもとゆきひろさんが移住してきたとたん、IT産業のメッカになりました。

しかしそれでもこの「都市の超高齢化」について、何か解決策はないでしょうか。

西村

ちょっとその前に、吉原さんからいいお話を聞いたので、あえて言いますが、アメリカから、私たちは何を学ぶかっていうことを考える時、大変参考になるのが、「エイジアン エスニック」の人のコミュニティです。ここに、日本が学ぶことが、すごくたくさんある。で、逆の極は、実は、フロリダに、「リタイアメント コミュニティー」っていうのがあって、ある時期、日本は理想とした。つまり、年寄りだけが、金持ちのね、集まって住む町があって、それがみんないいと思った。しかし、これを、日本に入れようとして、ほとんど成功していません。で、むしろ、世代間交流を意図してコミュニティを作るというのが、エイジアンの方が暮らすコミュニティで、すごいたくさん成功している。これから、もっともっと、ここに注目して、事例を集めるってのはいいと思います

それで、都会でどうするかということなんですが、今の話をあえてした理由はですね、ぼくら、何か、アメリカ的個人主義がすばらしいという時代があって、しかも、個人主義と利己主義を混同する人たちがすごくて、アメリカ人は個人主義だから利己主義だって話をいっぱい入れてきて、マーケット至上主義ってのが来たんです。ところがね、アメリカの社会で、当然、個人主義と利己主義は違うんですね。

個人主義は、かなり確立していますが、決して利己主義者ではありませんね。で、その時の一つの条件は、今、独居死と孤独死は違うという話を、今、大きく話題にしています。アメリカは、独居死は結構

多いです。1日前まで誰かと接触があったという死に方で、こういう独居死です。しかし、日本は、子どもがいるにもかかわらず、子どもも知らなかったというような、まさに孤独死が多いですね。それも一つ。

で、要するに簡単に言うと、私たち日本人は、これからコミュニケーションの仕方を工夫する。今、おっしゃった話の中で大事なことが含まれていたのですが、認知症のお年



寄りが、近所の保育園の子どもと交流することで、認知症の進行はかなり抑えられるという事例があるんです。これ、日本の中で、意外なことに数十、場合によっては、数百という事例があります。ところ

が、日本の社会がほんとに悲しいのは、例えば、左京区の人が東山区のことというイメージで、すぐ隣のこと、近所のことを知らないんです。これ、なんかコミュニケーション下手なんですね。まあ、私のすぐ近所に最新の臨床的なケアをやっている試みがあるのに、それを知らず、私の親はひどい目に合っているというわけなんです。そういう事例があるということを、最近3年ぐらいずっと、こういうリサーチをやってきて感じます。アメリカでは、エイジアンのエスニックコミュニティは、それなりのコミュニケーションがすごくできている。日本の場合ちょっと極端な話で悪いですが、東京の広尾に超高級住宅地があって、こないだ、そこの住人と話したら、ほとんど隣の人とは喋ったことがないそうです。それって、お金持ち同士でも、アメリカと違うんじゃない、なんて、そういうイメージがあります。

山極

日本のとても貴重な文化として、隠居制度がありますね。昔の隠居ってのは趣味人で、50歳を過ぎてから、習いものをして、三味線弾いたり、唄を唄ったり、いろいろやりましたね。いろんな近所との付き合いがある。要するに、これまでの人生とは全く関係なく、きちんと趣味人として生きる、教養を身につける時代—それがきっちり社会に組み込まれていたわけです。

ところが、今、例えば、安倍さんの政策だと、年金受給を先延ばしして、高齢者に、もっと働け、と言っている。これも、一つの政策だと思うんですが、果たして、それについていけるのか。一方では、若い人を増やすために、移民政策を敢行するというのもきいています。けれども、そういう話じゃなくて、むしろ、高齢者が、もっと豊かに生きられる政策が必要です。例えば、都市では、高齢者が増えた時に、高齢者が、コミュニティを作りにくいという事情があるわけなんです。集まる場所がなかったり、お互い、コミュニケーションをする土壌がないから、孤立して、個人で映画を観に行ったり、パチンコに行ったりして終わりという、大変寂しい老後の生活になってしまう。そっちの方を改善するほうが重要なんじゃないかな、と思います。

山口

そういう意味で、大学は重要な役割を持っていると思います。きょうは、もう一人、スイスから京都大学に教えに来ていらっしゃる河合さんがおみえですので、ちょっとスイスの事情を話していただけないでしょうか。

河合江理子（京都大学大学院思修館教授）

私は、スイス10年、フランス10年というような形で住んでいたんですけども、フランスは、ご存知のように、出生率2%を超えているんですね。その子どもを産むぐらいの歳の人は80%程が仕事しているんですね。だから、さっき、先生がおっしゃったように、女性が働くことによって、出生率は下がらないという、いいモデルケースになっているわけです。そんなフランスで、私も、仕事をしながら3人ほどの子どもを育てる友人とか見てきましたが、その体験からいうと、日本との大きな違いは、日本では、大都市で待機児童の問題がありますが、何か月かで、すぐ保育所に預けられる。それもほんとに安い。だから、おじいちゃん、おばあちゃんに頼ることなく、地方から来てても、預けるところもあるので安心して働くことができる。ベビーシッターなんかを雇えば、税金から控除されるなど、働きながら子どもを育てるいろんな仕組みができている。スイスは、逆に、そういうシステムがないですから、

日本の女性と同様に、子どもを産むか、仕事を続けるかのジレンマに悩むことが多いようです。

あと、やっぱり日本は、仕事の仕方が長時間で、休暇も取れない。これ、山口さんもフランスに住んでおられたからわかると思うんですけど、こういう状態の中では、子どもをつくって、その上、その後も、仕事ができるかどうか。大学のサバティカル（長期休暇）に関しても、やっぱり、なかなか大学で、取りにくいですよ。学生だったら1年遅らせればいいというようなものですが、やっぱり、戻る所がない。これまでの仕事を一旦やめたら、戻った時にはパートぐらいの仕事しかない。これじゃあ、考えてしまいます。一人目ならまだいいですが、二人目はどうでしょうか、となりますね。このへんが変わらないと、出生率は上がらないだろうなと思います。

西村

同じ意見ですが、最近、面白い経験をしました。日本の例外的な働き方のスタイルで、東南アジアの方と議論をした時のことです。日本で企業でも、子どもを産んで、手当もあ度出て、1年ほど休むことができます。後、(仕事に) 帰ってきた時、社員がいる、というんですね。確かに、1年間ランクのある人が帰ってきた時に、そと仕事をするためには、それなりのエギーが要りますので、分からないでもしかし、これを変えないと、もちろん、手当とかいろんなことは必要ですが、的な日本人の労働観を、相当変えないけないと思います。フランスの事例をさしていただいて、そのことが、一番、思うことですね。それだけ、ちょっと。



は、大
る程
その
じめ
のブ
の人
ネル
ない。
制度、
根本
とい
勉強

山極

もう一つ言えばね、例えば大学でも、アメリカとかイギリスだと、就職をしたい時に、夫婦両方も雇うというのが、ごく当たり前に行われているのですが、日本だと結構禁止しているところが多いですよ。つまり、同じ所に夫婦がいると、利益誘導が起こるかもしれないとかいう話です。だから、すごく共働きがしにくいんです。どちらかが単身赴任になってしまって、子どもを保育園に預けても、片親だけで育てられなくなってしまうので、すごく流動性が妨げられるわけですね。そういうことも改善していかないと、夫婦と一緒に働けるような職場を開放していかないと、多分難しいかなと思います。

山口

では、会場からいかがでしょうか。

三木

私、今、大学院生をやらしていただいています。定年までは、地方都市に単身赴任で企業経営をやっていました。私は、団塊世代でして、今、自分で何をできるかを自問自答しまして、私の周りの人たちに

対して、元気をつけていくということをやっています。というのは、今、人口問題とかやっていきますと、団塊が悪いんやというふうな感じで討論されますので、いや、そやないよ、ということ、データのものを、いろいろ読み返して説明しています。西村先生にもお願いしたいのですけれども、7頁目のところの「生産労働人口」なんですけれども、基本的には、15歳から64歳までで、先生は15歳から69歳までとされています。ところが、現実の世界は、今、大学を出て、20歳を超えているというわけです。だから、20歳から69歳というのを、シミュレーションの一つに入れていただき、場合によっては、年齢の幅をもっと広げてシミュレーションをやっていただく必要があるのではないかと思います。

要は、マクロの人間性の〇〇という法則があるんですけども…、5段階論です。私は6段階目が必要じゃないかと思います。そうなってきますと、日本も捨てたもんやないよという気になってくると思うんですが、いかがでしょうか。

西村

今のお話、全く同じことを考えておまして、まもなく、20～69歳の話もいろいろ試算結果を出します。後の方の話ですが、私も68歳でよくわかりますが、これから、70代の生き方、80代の生き方、あるいは90代、100歳代の生き方、それぞれ、ちょっとずつ違うと思うんですね。もちろん平均ですが、で、こんなことはね、世界中で初めてのことで、こんな大勢100歳がいる国は、もう、ないんです。だから、そこをいろいろな意味で考えていくというのは、とても大事だと思っております。で、その時、やっぱり、今おっしゃったように、世の中のお役に立つためには、どうしたら良いかってということが、一つの非常に大きなキーワードになると考えます。私、決して、きょう団塊いじめをしたつもりはありません。時間的な関係で省略したんですが、NHKなんかみんなね、65歳以上は働かない、って分類するんですね。しかし、そうじゃなくて、お金になるなら別として、どういうふうに社会に貢献していただくかの、いろんなメッセージが広がっていくといいと考えます。特に、私、個人的にはね、やっぱり、団塊の世代が「高度成長に寄与して、こんだけ豊かな世界を作った」ということは、ここまで出るのでもいいでしょうが、これは我慢する。つまり、これからの時代は、相当変わると思うので、自分たちが、昔、いかに苦労したかという話は、できるだけ避けた方がいいと思っております。ホント同じ意見でございます。

宮野 公樹（京都大学学際融合教育研究推進センター准教授）

山口先生のおっしゃった、家族で住んじゃダメってお話は面白かった。これは、すごく納得できて、職員さんも正しいことをしているんですよ。いわれたことを守っている。そう見た時に、少子化も結果論。ある問題を解決しようとした結果なんですよ。だから、そう考えた時に、少子化、そして高齢化…も、全然違った風景で、ぼく見えるんですよ。

ぼくらの幸福感、労働観って、いかなるものをもって理想として今ここに至って、次に、それは、いかなるものとして変わっているのか。つまり、相当明るいものとして語るができると思うんですね。

山口

今の話は、ワールドカフェのテーマになると思いますね。つまり、これから、ぼくたちは、労働観ないしキャリアデザイン、あるいはワークライフバランスを変えていかななくてはならない。どうやって変

えられるのか、どう変えていこうかということをお話するのがいいかなと思います。では、お題です。これから日本において、都市では超高齢化が起き、地方では、どんどん人口が減っていく。こういう状況を目の当たりにした時、私たちは、われわれの労働観を変える、ワークライフバランスの仕方を変える。まず、マインドを変えなくてはならない。そのビジョンをどこに持つか。そのビジョンに向かってどういうふうな仕方で近づけるのだろうか。それを、話し合ったらどうでしょうか。

それから、きょうは滋賀医科大学学長の塩田浩平さんが、先ほど駆けつけてくれました。一言お願いします。

塩田 浩平（滋賀医科大学教授）

私も、少子化がほんとに悪いことかなという感じを持っているんです。インフラはいっぱい今まで作られているし、文化的には、日本は結構豊かだし、これからの世代は結構出来るんじゃないかと思ったりします。それと、先ほどの宮野さんの話ではないですが、なぜ、政府とかは、ペシミスティックなことばかりいうのか。もう少し、政策を進める時に、心理学者なんか動員して、みんなの気持ちが明るくなるようにするべき。つまり、将来に希望を持てたら、子どもも産むし、結婚もする。絶対に、今苦しいから結婚をしないのではなくってですね、将来に希望をもてる気持ちになったら、結婚をし、子どもも生まれます。気持ちなんです。前から思っていることですが、何で、こんな悪いことばかり言って、気持ちを暗くさせるのか。ウソでもいいから明るい話を…。そういうことを人口問題研究所にやっていたら、とっていたんです。

西村

さっきも言いましたが、うちの研究所は、「子どもは減りません」といって「減ったじゃないか」と散々叱られたことがあるんです。それから、「糞に懲りて…」で、本当に暗くなってしまった。私は3年半明るくしようと頑張ってきましたが、ははは、なかなか明るくするのは難しかったですね。とにかく、私は、明るい所長でやってきました。

長谷川

どうも、ありがとうございます。では、山口さんから提起されました、どういうビジョンをかかげ、労働観、ワークライフバランスを変えていくのかをテーマに、いつもの様に、スピーカー、ディスカッションのチームに分かれ、ワールドカフェの討議に移りたいと思います。

（編集 辻 恒人）

「京都から挑戦する“新”21世紀づくり」

第2回「『少子高齢化』をどう捉えるか～

そのインパクトと政策」

☆ワールドカフェ

▽第1グループ報告 野田旬太郎（京都大学大学院思修館）

われわれの班で話し合ったのは、人口問題、高齢者問題あるいは、少子化問題にどう対応するかというところで、まず、都市と地方どちらにも住むという案が出たり、仕事と子育てのバランスをどう取るかを考え、それによって労働観を変えていけばいいんじゃないか。あるいは、行政が人口問題の解決に入るべきかどうかなど、さまざま意見が出てました。最終的なまとめなんですが、世代間で、最初のディスカッションでも出ていましたが、第1、第2、第3世代のバランス、そのコミュニケーションをとることで、人口問題は解決に向かうということになりました。

かつては、親子孫世代が、おなじ屋根の下に住んで、その中で、相互にコミュニケーションを取って、足りないところを補い合ってきたわけなんですけど、今の時代では、単身化などが進んでそれができなくなっている。では、どうするか。一つのコミュニティー、例えば、マンションの中でその機能を補うことができないかなど、いろいろ考えました。実際に、マンションの中に、いわゆる核家族世帯と高齢者の世帯が同居して、その中で、高齢者のところで子育てをやってもらおうとか、ある団地の中では、高齢者が託児所のようなことを引き受けて、子育て支援をしているというケースもあるという報告がありました。こういうふうに、コミュニティーとして、3世代がコミュニケーションを取れるような場を提供することで、子育ても高齢者問題もどちらにも対応できるのではないかということで、まとめました。

▽第2グループ報告 忠村健太郎（同志社大学）

主に、少子化と高齢化について話しました。少子化については、何で、若者が結婚しないかということなんですけれども、経済面の不安もそうですが、自分に人生経験がなかったりして、果たして自分で子どもを育てられるか、という不安みたいなものがある。それをどうしたらいいのだろう、ということで、いろいろ話しました。その中で、今は、やはり、同世代の結婚っていうのがメインですが、20歳も歳の差結婚というのがあるというのが例として出ました。それは、20歳も歳が違う人と結婚すれば、人生経験も豊富ですし、お金もあるので、そうしてでも子どもを生むのもいいのかなとか意見が出てました。

高齢化の問題では、70歳、65歳以上のシニア層をどう活用するのかということについて、頭脳労働と超単純労働に、すごく二極化している現状があるんじゃないかという意見が出て、これをもう一回、中間労働というか極端な頭脳労働と単純労働の間のような仕事がつくれなかなということでも話し合

いました。それで、例えば、京都にある「おもてなし」の心を活用した「ホスピタリティ産業」なんかは、高齢者に向くんじゃないかなという意見が出ました。

川田 哲也（京都大学大学院思修館）

なんで、日本でうまく少子化が止まらないのか。それは、もう、あまり、労働条件がよくないからじゃないか。例えば、東京の一極集中なんですけど、なんで集中するか、漠然とした憧れとか、何となくいいという、いわば信仰心みたいなものがあると思うんですね。それで、討議の中で出た一点だけ面白い話を紹介します。若いうちに、外に出る経験をするのが大事じゃないかということです。例えば、20代前半であれば、1週間だけでも、シリコンバレーとかシンガポールに行くだけでも、自分を見つめなおし、世界のレベルを知ることにつながる。それは、「ハードルが高いから頑張らなくちゃ」ではなくて、割と、自分たちだって自信をもって立ち向かえるじゃないかということ。こういう自信を得られることだけでも、外にでる意味があり、若い時から、こうした働き方、労働観について見つめなおすことに繋がる機会を創ることが大事じゃないか。

▽第3 グループ報告 阿曾沼飛昂（京都大学大学院工学研究科）

ちょっと違う話で盛り上がりまして、あまりまとまっておりません。で、キーワードふうで紹介させていただきたいと思います。まず、コミュニケーションのできる場を創造するというのがいろいろなところで必要で、老人と子どもが接する事ができるというのが重要だろう。ただ、コミュニケーションと言いましても、今の若い人たちが使うツール、SNSとかっていう、コミュニケーションの質自体がジェネレーション間で結構違うと思いますので、それは、コミュニケーションの場を創る中で、考えていかなければいけない問題じゃないかと思います。

それから、最近の若い者は、という話が出ました。ぼくも若者なんですけど、さっき、西村先生は「先のことなんかなんもわからへんで」とおっしゃいましたが、でも、会社に入ると、人生プランかなんかたてさせられて、「あなたの生涯年収はいくらで…」とか。なんもわからんといいいながら、そういう希望のない暗いことしか言われなくて、つらいよねみたいな。研究職についても、オブリゲーションが多すぎて、自由に研究できず、野望も持ちにくいみたいな、とりあえず暗い時代で、これを何とか変えていかなきゃ子どもはつくれるのかなあという、まあ、そういうことになりました。

それから、最後は、組織にアビリティとか生きがいとかを求める時代は、もう終わったのかな、という話も出てまして…。自分なりのアイデンティティとかを持つ中で、子どもを産むことをどうしていくかを、若い人は考える時代になったのかな、とそういう話だったと思います。

▽第4 グループ報告 中野 千春（市場調査社大阪）

こちらのテーブルでも、明るい話を、と始めたんですけども、前半は、結構暗い話に終始してまして…。このテーマで話をしようとする、どうしても若者と年寄りの戦いになるということで、前半は年金の話をしました。その後、年寄りが悪いという話がありつつ、若者も悪い、若いのが恋愛しないから悪いというような話にもなりました。で、なんで恋愛しないんだろということについては、男女が仲良すぎる、中性化しすぎている、さらに、働き過ぎで疲れているというようなことも出て、そもそも、子どもの必要性を感じていないのではないかということまで出ていました。その後、若者といっても、大学生は明るいんだけど、30代が暗いんだよみたいな話が出てきて、私は、女性は責められないと言っ

ていたんですけど、ここで、30代できっちり責められたわけです。

それで、どうしたらいいのかということになり、結局、若者がどう年寄りからお金を引き出すことができるか、これがキーワードかなど。どう引き出すかという話は、例えば、子ども作っちゃって、親からお金を引き出せばいいとか。お年寄りに、孫の教育費を出してもらおうとか。あと、お年寄りの活用については、子どもとお年寄りは親和性が高いので、子どもの見守りをしてもらえばいいのでは、という意見もありました。最後に、視野を広げるために、若者を海外に行かせたりとか、日本には資産があるのでそれを使い、また、それを日本に持ち帰るようにする。これ、西村先生がおっしゃったのですが、日本は、「あほが幸せになれる社会」というのが、一番のとりえということですので、これを、日本のすばらしさとして世界に伝えていくべきだろうと思いました。

▽第5グループ報告 日田 早織（京都大学大学院農学研究科）

私たちのグループでは、まず、労働観、これからは、多様な労働の仕方を認めていくというか、そういう考え方が大事という話をしました。例えば、時短勤務、とか、契約社員とか、契約社員からパフォーマンスが上がったから正社員になれる、一旦子育てで抜けても戻れる、などの柔軟な労働観、労働制度が必要だという話が出ました。

結婚をしなくなっているという話では、女性も自己実現を目指す傾向が強く、キャリア志向への関心が高く、恋愛の優先順位がどんどん下がっている。あるいは、結婚しなくても、楽しいことが他にいっぱいあるということが広がっているんじゃないか。それから、男性が「嫁を食わせる」といった志向ではなくって、女性もお互い自己実現していく。今、山口先生から、奥様が45歳過ぎて起業したというお話を聞きました。山口先生が、子育てが終わった後専業主婦になるのはもったいない、ということで勧められたそうなんですけれども、そういう働き方もあるんじゃないか。それから、結婚したらそれはカンパニーで、男性が稼いで女性を食わせるという思想ではなく、男女がお互い支えあっていくというのが、いいなと思いました。

それから、今の男性基準の社会観ですとか、上下関係があるという社会観は、20世紀の労働慣行の視点で生まれたもので、母系社会だった日本はずっとそうだったわけではない。21世紀には、案外、ちょっとしたきっかけで変わっていくんじゃないか、そういうことを考えていくことが大事じゃないかという話も出ました。

それで、これからのあり方ですが、おじいちゃんおばあちゃん世代の人が、カレッジというコミュニティの中で、次の世代、その次の世代を育てていけばどうかというお話がありました。

長谷川 和子（京都クオリア研究所）

有難うございました。では、スピーチをしていただいた西村さんから、各テーブルの報告を受けてということで、一言お願いいたします。「あほが幸せになれる社会」についても、もう少し詳しくお話いただきたいと存じます。

西村 周三（国立社会保障・人口問題研究所名誉所長）

話をうかがっていて、言いたいことが最後に一つあります。最近、「6次産業」という言葉が流行っています。1次、2次、3次…、キーワードは6が1+2+3ではなくて1×2×3、つまり、何があってもあかんというわけです。2があなくても3があってもあかん。で、実は、1は結構いい加減に思っ

ていて、みんな、「アホでもできる」というイメージがありました。だが、実は違う。農林水産業は、中卒でもできるという、先入観があったが、しかし、実際はすごい知恵がいる。それこそあほな先入観があったために、自信を失い、そのために衰退しました。2次、3次、きょうおみえの先生方は3次産業で、最も知的な産業であり、偏差値の高い人種です。でもね、そういう人たちが、1次、2次から学ばないと、ほとんど3次だけでは成り立たないということを、最近痛切に感じています。で、これからの社会は、1次と2次と3次がみんな揃っている社会が、当たり前な社会。で、農業やったら、漁業もそうですが、年寄りもある程度役に立つケースがある。それから、定時に出勤する製造業。日本の製造業はすごい。アメリカはひどいです。金曜の夕方と月曜の朝は生産性が落ちます。遊びたいからね。日本は、両方とも、そんなことはありません。遊びたいし朝早いのも嫌だけど、ちゃんとやるんです。これが日本の製造業の特徴です。ただ、3次産業に、ちょっと、ブラック企業といわれるような、製造業の論理を持ち込んでいるところがあります。3次はやっぱり、自由な発想、面白いことをするのが大切。偏差値の高い人間と低い人間が共存する産業が3次産業と思っています。そういう意味で、偏差値の高い人は、下げる必要はありませんが、低い人と共存する社会を目指してほしいと思っています。

長谷川

クオリア AGORA は、今、西村さんがおっしゃった通り偏差値の高い人も低い人もというところとちょっと誤解を招くかと思いますが、職業も年齢も異なる多様な方々が同じ場で何を学ぶのかという形で進めてきました。それで、ずっと、力をお貸しいただいている山極さんがこの10月、京都大学の総長に就任されることになりました。立場は変わられますが、これからもこの会に参加し、お力を貸して下さるとおっしゃっていただいております。ちょっと一言お話を聞えますか。

山極 寿一（京都大学大学院理学研究科教授）

有難うございます。最初から参加させていただいておりますが、きょうのように、若い人が多く参加して、発言をドンドンしてくれるというところに、会の変遷ぶりを感じました。これから、このようなさまざまなジャンルのいろんな人が相乗りをして、どんどんディベートできるような機会を、私もいっぱい作ればなと思っています。AGORA は、そのきっかけになってくれました。メンバーの山口さんも京都大学に来られましたし、これからは、京都大学のど真ん中でこういう議論をやってほしいと思っています。このまま AGORA のメンバーでいるつもりです。今後とも、よろしくお願いします。